北條文書　單

H20
456

一

北條家々系　一ノ一

早雲……道益（初代）―道可（二代）

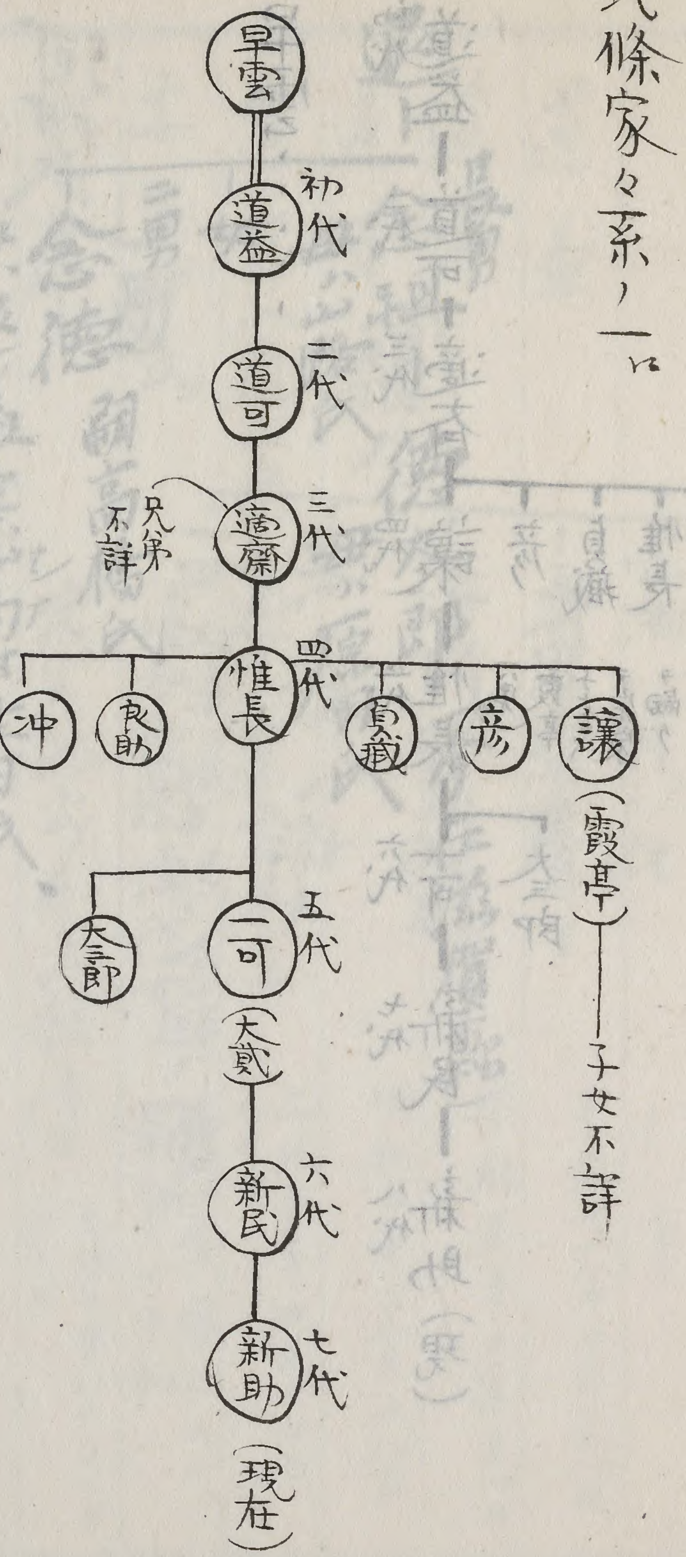
適齋（三代）　兄弟不詳

- 讓（霞亭）……子女不詳
- 孝
- 貞斎
- 惟長（四代）―一可（五代）（大貳）―新民（六代）―新助（七代）
- 良助
- 沖―大三郎

家系一ノ方正ニ申モノナレドモ霞亭先生ハ
所謂分家トナリ子孫絶ヘタルコトヽナレリ
故ニ家系二ノ如クニテハ如何

鷗外藏書
東京國大學圖書之印
B 23475

北條家々系ノ一

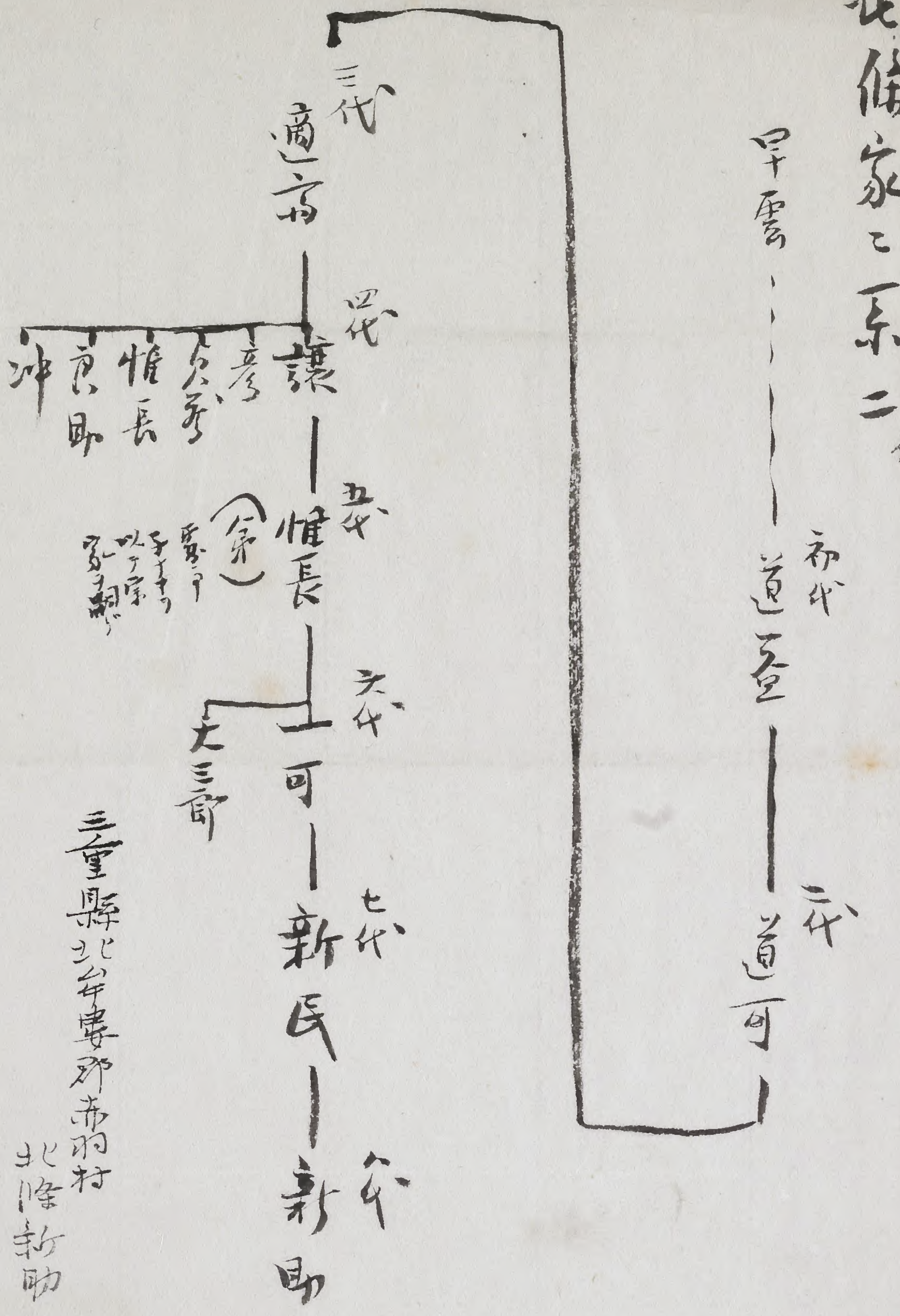


△備考

北家系ノ方正シキモノナレ氏霞亭先生ハ所謂分家トナリ子孫絶ヘタル

コト故ニ家系ニノ如クシテハ如何

北條家之系二



三重縣北牟婁郡赤羽村

北條新助

北條家々系ノ二

早雲、、、、

初代 道益 ― 二代 道可 ― 三代 適斎 ― 四代 讓 ― 五代 惟長 ― 六代 一可 ― 七代 新民 ― 八代 新助（現）

適斎の子：
- 讓（四代）
- 彦
- 貞藏
- 惟長
- 良助
- 冲

惟長（弟）霞亭 子ナキヲ以テ宗家ヲ嗣グ

惟長の子：
- 一可（六代）
- 大三郎

北條霞亭略系ノ三

讓 ― 退 ―

- 長男 念祖 母ハ山路氏 ― 徳太郎（今在滋賀縣） 母ハ原田氏
- 一女
- 二男 念徳 嗣高橋氏 母ハ退ノ後妻 山南（サンナ）村 桒田氏

	法名	死亡年月日 享年
道益	三友道益菴主	享保十一年十月二十八日
道可	可卯至道菴主	安永五年十二月二十八日
道可妻		明和七年十二月十八日
道有(適斎)	適斎翁桂意斎菴主	文政六年四月十四日 七十八
妻 中村氏	浄智妙圓清浄女	天保四年霜月二日 享年六十九
靄亭	歳寒院靄亭弘毅居士	文政七年八月十七日 四十四
彦		寛政十一年己未九月十五日
貞蔵		寛政三年四月三日
惟長(立敬)	碧山居士	文政十二年八月晦日 行年二十四

河村氏
- 意篤
  - 重固 ― 菊枝
  - 女(沼隈郡神村、岡本氏ヘ嫁)
  - 女(前田徳十ノ妻)
- 退
  - 原田氏
    - 一女、北条惣三郎(念祖)ヘ嫁ス
    - 二女、森元八ヘ嫁ス
    - 三女、阿部ヘ嫁ス
    - 長男全蔵
    - 四女、村片ヘ嫁ス
    - 二男、卯七郎

妻れ以（田口氏）法巖貞本善大姉　明治八年三月三日　同年七十七

良助（谷岡氏ヨリ）寿岳良仙居士　明治五年九月三日　同年七十五

冲

縫　寛政十二年七未九月著

英　寛政六年閏十一月十四日

通

一可　五兵衛嫡子　養心軒貫道一可庵主　明治四年六月十五日

大三郎　一可次男　法學良雄信士　天保十五年八月七日

志摩国鳥羽　小石川区茗荷谷町十五番地　角利助

領主九鬼家此地ヲ去ル後ニ封ヲ受ケタルハ内藤家トス

内藤忠重（伊賀守、志摩守）仁兵衛忠政ノ長子ニシテ天正十八年遠州ニ生レ長シ十八ト称ス将軍秀忠ニ仕ヘ、後世子家光ノ傅タリ、寛永十年三月十八日鳥羽城ヲ賜フ、承応二年四月、江戸ニ卒ス年六十八、養亀院定安了性大定禅門ト謚シ神田台量院ニ葬ル、長男忠政家ヲ嗣ク

忠政（信濃守、飛騨守）元和二年生ル 性ハ甚タ卑 忠勝ト

云フ、延宝元年七月西ノ城ニ於テ卒ス年五十七、長子
忠次家ヲ襲ク
忠次（信濃守）正保二年生ル、某年卯ト称ス、廃
嫡ノ江戸ニ嫡ヲ辞シ弟忠勝之ニ代テ立ツ、寛永之年五月卒
年六十、
忠勝（和泉守）明暦元年生ル、年十九ニシテ兄ノ後ヲ襲ク
延宝八年将軍家綱薨ズ忠勝年ノ挙シ葬事ニ奔シ芝増上寺
法会ノ警固ヲ司ル、其年六月廿六日俄カニ神心ヲ乱シ奉行
永井信濃守尚長ヲ斬ル、同月廿七日其罪ニ依テ芝青竜寺ニ於テ
死ヲ賜ヒ其領ヲ没セラル、時ニ年二十七、

月嶋大黒屋製

内藤殿は
の神田橋内

徳川四代将軍家綱公 延宝八年五月八日薨去
仝月廿六日東叡山に御葬送 厳有院殿と称す
延宝八年五月将軍御不例大漸に付 家光公の
四男徳松君即ち正三位中納言綱吉公神田御殿
より御登城直に西丸に御移 翌七日御養君に
作出 仝年六月廿六日厳有院殿の四十九日相
当に付御法事あり
厳有院殿御法事於増上寺有之 永井信濃守内
藤和泉守の両人喧嘩致し 右者廿六日御法会
の席にて和泉守兼々意趣有之信濃守を[illegible]

以唯一折に切る　御奏者番土屋相模守早速和泉守を抱留短刀を奪取といへとも信濃守即死す　和泉守は本坊の居にて御徒一組守之其夜両家の家来起りて増上寺を囲む　又松平陸奥守は元来増上寺の火の番故早速馳来る所之より火災起りと心得て火消者数千馳集騒動に及といへとも　門を固め出入を留め右の趣達　御聞翌日和泉守義は青松寺に於て切腹ニ作付検使寺社奉行板倉石見守　大目付渡辺大隅守御目付能勢惣十郎差添罷越す

右之件ニ付志摩国鳥羽の城主内藤和泉守忠勝は延宝八年六月廿七日於青松寺切腹ニ作付鳥羽の領地三万三千石を没収せらる
丹後国宮津の城主永井信濃守尚長は宮津七万石の領地を召上けらる

延宝八年永井能登守直圓は大和国新庄一万石ニ封せらる　大和の葛上葛下忍海の三郡なり
直圓は右近大夫尚征（丹後宮津城主七万石）の次男なるらん
尚長の先代

右は伊澤蘭軒直續面白存候而私ら寸島田のもと
一寸よみし人
牛込江戸川畔
秋莊老人

北條適齋先生 （碑文写）

先生諱寛字士綽號適齋通稱道有姓北條其先自
早雲氏出子孫仕丹藩候候國除退今地世以醫為
業先生娶中村氏生六男四女長男讓字景陽次男
彦字子彦三男貞蔵皆先歿四男惟長字立敬嗣
家五男良助為岩田氏嗣六男沖字滄人為山口氏嗣
長女縫次女英皆歿第三女流產季女名通先生為人
氣宇爽朗聞人一善若享大賚聞一不善若有所
失或讀古人書傳談前言往蹟其於忠良切齒
於奸佞宛如言眼前事慨然歎詫不措性嗜酒但
不善獨飲日夕邀客對酌率以為常其飲量過
人老而不衰文政七年甲申夏四月十四日暴疾而

卒享年七十有八里中弟子嘗受字學書者凡七十
餘人相謀有立碑之舉立敬令某撰之文先生有
七十自壽詩足以想見其平生因以代銘其詩曰
頑健身徒老　豈堪當頌辭
獨醪會親戚　黄菊照茅茨
小隱偕夫婦　大歡看女兒
百年醒且醉　我命復何疑
維時文政七年星次甲申夏六月
斯波公褒撰并書

北條適齋先生（碑文寫）

先生諱寛字士綽號適齋通稱道有姓北
條其先自早雲氏出子孫仕内藤侯侯國
除退今地世以醫為業先生娶中村氏生
六男四女長男讓字景陽次男彦字子彦
三男貞藏皆先歿四男惟長字立敬嗣家
五男良助為谷岡氏嗣六男冲字澹人為
山口氏嗣長女縫次女英皆歿第三女流
產季女名通先生為人氣宇爽朗聞人一

善若亭大賚聞一不善若有所失或讀古人書傳談前言往蹟其於忠良功達於姦佞究如吾眼前事慨然歎詑不措性嗜酒但不善獨飲日夕邀客對酌率以爲常其飲量過人先而不哀文政七年甲申夏四月十四日暴疾而卒享年七十有八里中弟子嘗問字學書凡七十餘人相謀有立碑之舉立敬令某撰之文先生有七十自壽詩足以想見其平生因以代銘其詩曰

頑健身徒先　豈堪當頌辞
濁醪會親戚　黄菊照茅茨
小隱偕夫婦　大觀看女兒
百年醒且醉　我命復何疑

維時文政七年星次甲申夏六月

斯波公衮撰并書

△大日本人名辭書所載ノ傳記ハ既ニ御存知ノコトニ付省略仕候

北條霞亭先生（在志摩國的矢ノ碑文寫）

先兄子讓爲敎授于江戸福山邸以文政
六年癸未八月七日卒終天之恨異土之
感瘞巖印章以表首丘
劣弟北條惟長建

自壽

頑健身徒老豈堪當頌辭
村醪會親戚籬菊照茅茨
小隱偕夫婦大歡看女兒
百年醒且醉我命復何疑

北條寛拜題

游子省親日高堂上壽時
三弟及一妹次第侍嚴慈、
嚴君齡七秩起居不少衰
偉貌仍少壯丹顏秀白眉
此日會親戚頌聲滿茀茨
歡情浩如海顧吾却感思
讓也不肖子少小違誨規
跌蕩不量分巧業妄自期

意謂身顯達竹帛名可垂
庶報父祖德奉養兼不虧
不事家人產遠与膝下辭
跡拙不合世蹉跎何所為
棲〻十餘載置身無立錐
鄉黨是非起到處遭罵咄
哀〻吾父母愚哀深見知
在此羞辱際恩愛終不移

遂住千里外終年苦別離
歸來雖云樂一物無獻遺
竊向弟妹歎包羞汗淋漓
先人時一笑兒也言胡癡
窮通苟動心便是流俗比
吾家衣食乏未至逼寒饑
池華方長大樂以送生涯
唯念道義高勿憂名位卑

前修有遺烈思齊相友師
餘事更不問好須勸酒卮
聞此天日霽峯體當春熙
君子有三樂其一見享之
以此換世榮貪賤亦奚悲
誓當奉尊旨成立不相欺
但願長具慶壽算等鶴亀
拜舞重獻杯香風撲酒隨

衆賓皆已醉菊花秋一籬、
家大人適齋先生七秩壽
宴恭賦
文化丙子秋閏八月
男譲百拜具草

霞亭先生行状

先生諱讓字子讓通稱讓四郎姓北條氏志州的矢人霞亭天放生皆其別號ナリ後嗇陽克宗ノ人トナリヲ慕ヒ一ニ景陽ト字ス其先ハ新九郎早雲氏ヨリ出ヅ子孫内藤侯ニ仕フ侯国除ス曽祖諱某始テ今ノ地ニ移リ医ニ隠ル道益ト称ス祖道可名ハ俊立号又玄考名寛字士綽称道有号適斎母中村氏子十人アリ先生其長子ナリ安永九年庚子九月五日ヲ以テ生ル

先生幼メ重厓戯嬉ヲ好マズ惟演史ヲ読ヲ以テ

歓トナス年十四里中ノ児ト出遊ブ一士人アリ
熟視久フシテ其同行ニ謂テ曰此子挙止凡児ニ異
ナリ他時必大名ヲ成シ是ヨリ潜思力行唯学是
勉ム一日孝経ヲ読ミ其ノ立身行道揚名於後世
以顕父母ニ至リ慨然トシテ曰景シテ能ク此ノ如ク
ナラバ孝子タルヲ失ハズ父其言ヲ異デ携テ京
師ニ之ク皆川淇園ニ師事セシム学業大ニ進ム
後江都ニ遊ビ亀田鵬齋ノ塾ニ寓ス鵬齋深ク先
生ヲ愛敬ス忘年忘義視ル朋友ノ如シ其妻ニ謂

テ曰子讓年少ト雖モ志行端愨ナリ恨一女子ノ
之ニ配スルナキヲ
当時一藩侯聘シテ師表トセント欲ス先生壮年高
踏ニシテ就テ屑トセズ已ニ期日ニ及ブ友人韓連
玉ト陸奥ニ遊ブ聘ヲ辟ルナリ
越後ノ人関根某屡書ヲ馳テ其ノ北遊ヲ請フ因
テ其家ヲ主トス論語詩書ヲ講ズ幾モナク南皈
セリ
伊勢ノ人某請テ林崎書院山長トス蔵書数万巻

日播シ月玩シ造詣益深シ連玉恒軒敬軒呆翁雨航諸名士ト相過從ス
先生意ニ幽閑ニ就キ其蘊スル所ヲ吐ント欲シ洛西嵯峨ノ山水最清遠ナルヲ擇ビ築テ居ル月江上人ト方外ノ交リ厚シ後父ノ命ヲ承テ都下ニ出テ教授ス嵯峨ノ松梅竹ヲ移シテ庭ニ植愛玩トナス堂ヲ歳寒ト号ス
癸酉三月備後菅茶山ヲ訪フ茶山先生ヲ見テ歓甚シ留連累日曰予年七十ニ近シ衰病交侵シ教

育ノ労ニ堪ズ願クハ兄代リ授ル數年セヨ先生父母モ亦年老タルヲ以テ遠離ニ忍ビズ皈テ是レヲ父母ニ告ク父母曰己ニ長者ノ眷ヲ辱ス義辞スベカラズ於是復備後ニ之キ廉塾ニ都講タリ時ニ福山侯俸五口ヲ賜ヒ藩ノ学館ニ読書セシム
後ニ侯江都邸ニ召テ文学トナシ待スルニ殊礼ヲ以シ格大目付ニ準ジ俸三十口ヲ賜ヒ妻子ヲ将ヒ江都邸ニ赴クヲ命ズ文政四年辛巳挙家東

行居ルヿ三年先生年四十四病ニ罹リ不起實ニ
文政六年癸未八月十七日ナリ巣鴨眞性寺ニ葬
ル
先生邸ニアルヤ侯之ヲ待スル優寵章服器物
ノ賜アリ疾病ヤ奥菓ノ賜アリ
先生邸ニアリ邸ノ学風尨駁雜先生之レヲ患ヒ
其正ニ皈センヿヲ欲シ清ノ高愈所著小学纂註
ヲ翻刻シ以テ書生ニ分チ之レヲ導ント欲ス剋
成テ卒シ其志ヲ遂ズ

先生淇園鵬齋ニ学ブト雖モ其学ヲ奉ゼズ一ニ
程朱ヲ以テ主トス而固陋ナランヿヲ恐レ頗ル博
覧ヲ務ム
先生詩文ヲ善ス尤力ヲ詩ニ用ユ杜少陵ヲ学ビ
杜詩插註ヲ著ス又和歌ヲ善ス風趣ノ至ル所ロ
或ハ詩ニ勝ルト云
先生為人風流瀟洒塵介ヲ以テ意トセズ而狷介
守ル所アリ儼然阿徇セズ其人ト交ル擇デ而之
ヲ友トシ能恭能信平生自奉ズル質粗ナリ客至

レバ之ガ為ニカヲ竭メ営辦ス曽テ貪甚シ以朝タスルヿ能ハズ亦意ニ介セズ平生好デ飲酒或ハ指飲スル者アル便チ就テ歡ヲ盡ス其道ニ非レバ輙辞ス性元急ナリ後其非ヲ患ヒ以テ自ラ誡ム曽テ曰士一日ノ業アリ終身ノ業アリ緩ニメ以テ之ヲ履セザレバ百事錯戻ス又曰胸懐ヲ高クスル読書ニ如クハナシ胸懐高カラザレバ良士タリ難シ又曰読書ノ要小心ト放膽トニアリ惟此四字獨リ読書ニ非ズ凡ノ雑技ト雖モ亦然リ其好古力行スルヿ饑者ノ食ヲ得テ自定ル能ハザル如シ又善強記ス過目忘レズ居恒ニ睡リ少シ又管ヲ握ルニ敏シ晝読披抄ス人ノ書ヲ寄ル老少ヲ問ズ必手報ズ其書生ヲ率ル才ニヨリ之ヲ導ク必之ヲ道ニ寓ス周旋論説一ニ倦色ナシ人ト言フ是ヲ是トシ非ヲ非トシ道理ヲ窮盡メ止ム決テ妄ニ隨ハズ平生自行脩整法度アリ幽室ニアリト雖モ皎然自ラ欺カズ雅言ス今ノ学者其文ヲ内ニシ其行ヲ外ニス夫レ学ヤハ已

ンヲ治ルニアリ学デ已ニ益ナク人ニ裨ナキ猶
学バザルガ如シ
先生度量清遠己ヲ虚〆能下ル而モ凛然犯スベ
カラザルノ威儀アリ林壽ニアルノ日暴客アリ
直ニ入テ牀ニ憑ル大漫罵ス先生ヲ覰テ俄ニ畏
縮叩頭〆曰小人酒ヲ被リ君子ノ堂ニ上ル其罪
尤深シ小人兒アリ幸ニ先生教ヘテ小人ノ此行
アルガ如クナラシムルヿナカレ
先生嘗テ京師ノ客舎ニ寓ス夜半孤燈忽チ美人

ヲ見ル狐夭[illegible]ナリ知ラザルヿ示ス妖去ル嘗テ海
ニ舶ス風変ジ帆破レ満船震慴ス先生自若ナリ
以テ其養フ所ヲ見ルベシ
的矢僻郷ニ〆未右文ノ化ヲ被ラズ先生挺起ス
ルニ迨デ始テ学問ノ道アルヲ知ル今里中ノ子
弟往々書ヲ挟ミ字ヲ問フ者アル益シ先生ノ力
ナリ
所著霞亭摘稿助字辨中庸統言霞亭渉筆嵯峨樵
歌薇山三観飯有詩嚢乞食袋板井蛙杜詩挿註詩

集文集歌集或ハ已ニ梓ニ上セ或ハ未書ヲ成サズ

五弟曰彦字士彦曰貞蔵皆夭ス曰惟長字立敬父ノ家ヲ嗣ク曰良助出テ谷岡氏ヲ嗣ク曰冲字瀁（澹）人出テ山口氏ヲ嗣ク四妹曰縫曰英曰某又皆夭ス曰通植田氏ニ適ク

配井上氏備後早戸村井上源右衛門ノ女ナリ母菅氏茶山ノ妹ナリ茶山井上氏ヲ養ヒ女トシ先生ニ妻ハス先生没メ侯俸三口ヲ賜ヒ其身ヲ終シム今江都邸ヲ辞シ備後ニ帰リ菅氏ニ寓スニ女ヲ生ム曰梅曰寅皆夭ス河村氏ノ子退ヲ養ヒ以テ先生ノ後ヲ承シム

霞亭先生事跡

霞亭先生諱ハ譲字ハ子譲通称ハ譲四郎霞亭又
天放生ト號ス安永九年庚子九月廿日志摩的矢ニ生ル
寛政五年京都ニ之キ皆川淇園ニ師事シ後江戸ニ行キ
亀田鵬斎ノ塾ニ寓ス學成リ陸奥ニ遊ビ越後ノ人
関根仲彜ノ請ニ因テ其ノ家ニ至ル幾クモナクシテ帰ル伊
勢ノ人某ノ請ニ因テ林崎書院ノ山長トナル後洛西嵯峨
ニ寓シ又父ノ命ヲ承テ都下ニ出テ教授ス文化十年三
月菅茶山先生ヲ訪フ（文化十年先生西遊セント欲シ神辺ニ至
ル七日市北側今ノ油屋前京熊太郎ノ屋ニ当
ル大ナル旅館アリコノ旅館ニ投宿ス廉塾ノ諸生来リ経史詩書中ノ難義
ヲ質問シ先生ヲ辱メントス先生答辯明確循々然トシテ説明ス諸生赤面シ
テ帰リ茶山先生ニ告ク先生曰クコレ豫テ待ツ処
ノ人ナリ豈沽筆ノ類ナランヤト直ニ行テ先生ヲ伴ヒ帰リシトニフ）先生ノ請ニ因テ

留テ廉塾ノ都講トナル茶山先生姪井上氏諱敬ヲ配ス
文政二年四月十七日福山侯（正精公）俸五口ヲ賜ヒ時ニ弘
道館ニ出テ書ヲ講セシム文政四年四月十三日侯江戸邸ニ
召ス同年五月十一日福山ヲ発シ同年六月二日江戸邸ニ着
ス同月七日侯暫時留ルベキ旨ヲ命ゼラル同日侯丸山
学問所ヘ出テ書ヲ講シ諸生ヲ教育シ儒官ト協議スベキ
旨ヲ命ゼラル同月十三日侯俸三十口ヲ賜ヒ大監察ニ
班シ儒官トナシ内直ヲ命ゼラル同侯江戸祗役ヲ命ゼ
ラレ儒官ト協議シ月並講釈ヲナスベキ旨ヲ命セラル同
年八月九日江戸ノ引越ヲ命セラル同月二十三日妻子召致

シ為メ福山ニ赴クベキ旨ヲ命ゼラレ同月二十五日江戸ヲ発シ
九月二十三日福山ニ着シ同年十月五日妻子ヲ携ヘ福山ヲ発
シ同年十二月十三日江戸邸ニ着ス文政六年八月十七日病
歿ス享年四十四ル巣鴨真性寺（真言宗）ニ葬ル
釈氏歳寒院霞亭弘毅居士ト謚ス同年十月五日侯
配井上氏ニ俸三口ヲ賜フ同年同月二十二日福山ニ引越ヲ
命セラレ江戸ヲ発シ神辺ニ帰リ菅氏ニ寄寓ス文政
七年悔堂先生ヲ養テ家ヲ嗣シム嘉永二年八月十三
日病歿ス享年六十七駒南網付谷ニ葬ル釈氏後
凋院秀誉清淑大姉ト謚ス

一霞亭先生華押

北條系図

天正十八年七月小田原落城セシカバ同年秋北條家ノ一門家老悉リ高野山ニ登リシガ同年冬山ヲ下リ摂津ノ天野ニ居住ス其後家祖ハ志摩鳥羽ノ城主内藤志摩守忠重ニ仕ヘ其子道益斎ノ時内藤家断絶シテ浪人トナリ同國的屋ニ隠レ醫ヲ業トス

道益斎 ― 道可 名俊立 号又玄
　　　　 道有 名寅 字士緯 号適斎

- 譲 字子譲 通称譲四郎 号霞亭 又天放生
- 彦 字士彦 早世
- 貞藏 早世
- 惟長 字立敬
- 良助 嗣谷岡氏
- 冲 字澹人 嗣山口氏
- 女子 縫 早世

- 退 字進之 通称新助 号悔堂
- 念祖 字修德 通称益三郎 号笠峯 又何若人 有斎
- 念德 字叔道 通称洗蔵 嗣高橋氏
- 德太郎
- 梅 文化十三丙子五月十九日生 文政元年六月十二日夭
- 虎 文政七年甲申八月三日夭

女子　英　早世

女子　早世

適　植田氏

新太郎　後（従）名ヲ大弐ト改ム　主計　名粛

名儼

一説ニ字ハ深叔子儼ニトアリ

伊勢国山田ニ移住シ御師トナル

新太郎儼　文政五年壬午春生（[illegible]）

北條霞亭ノ墓

巣鴨電車終點ノ左側真性寺内ニアリ
墓銘ハ頼山陽ノ撰并書ニシテ實ニ山陽ノ絶筆ト
稱スベキモノナリト云フ

濱野知三郎

北條霞亭（大日本人名辭書）

儒者ナリ名ハ讓字子讓一字ハ景陽、霞亭ハ其號
又天放生ト號ス志ニ摩的屋ノ人曾祖道益祖道
可、父道有皆醫ヲ以テ業ト爲ス父中村氏ヲ娶リ
六男四女ヲ生ム霞亭ハ其長ナリ幼ニシテ讀書ヲ好ム父
次子立敬ヲ以テ家ヲ承ケシメ霞亭ニ遊學ヲ聽シ京
及江戸ニ入ル學成リテ一藩侯聘シテ之ヲ致サント欲ス
會聯玉來ル乃偕ニ奥羽ニ遊ビ以テ之ヲ避ク又越後ニ
寓シ南歸シテ伊勢林崎院長ト爲ル院ノ藏書萬卷
因テ益深博ヲ致ス霞亭モト嵐峽ノ山水ヲ愛ス是ニ
至リテ其最清絶ノ處ニ就キテ屋ヲ僦ヒ弟ヲ招キテ
與ニ居リ畫研壺酒蕭然トシテ自適ス後備後ニ

遊ビ管茶ヲ訪フ茶山留メテ其塾ヲ掌ラシメント欲ス
霞亭之ヲ父ニ諮ル父命シテ辞スルコト勿ラシム尋テ福
山藩五口ヲ給シ時々書ヲ説カシム尋テ特旨ニ之ヲ東
邸ニ召シ三十口ヲ給シ大監察ニ准ズ将ニ家ヲ挈ゲテ
東ニ従ハントシ丸山邸舎ニ居ルコト三年病ニ罹リテ
起タズ時ニ文政癸未八月十七日ナリ年四十四霞亭人
トナリ癯ニシテ晳隆準ニシテ眼光アリ酒ヲ嗜ミテ風
神脱灑而シテ猶介苟モ合ハズ諸ノ弟ニ友ニ交リテ終
リアリ又同酔ノ情ニ至リテハ或ハ終身忘レズ而シテ
己ヲ治ムル端慤ニシテ人ヲ欺カズ嘗テ曰ク学ハ己ト
人ニ益ナケレバ猶学バザルガ如シト学ハ洛閩ヲ主
トシテ輔クルニ博覧ヲ以テス東邸ノ士風駁雑セル

ヲ患ヘ小学書ヲ授ケ徐ロニ之ヲ導カント欲シ未ダ
遂ゲズシテ歿ス最詩ヲ善クシ毎實ヲ叙シテ鄙シカラズ
事ヲ記シテ空ナラザラシム清勁ハ其人ノ如シ著ス所
霞亭渉筆嵯峨樵歌薇山三観及杜詩榑渠
等アリ

（白文 碑文）

霞亭先生

先兄子譲為教授于江戸福山邸以文政六年
癸未八月十七日卒終天之恨異土之感瘞厥
印章以表首丘

劣弟 北條惟長 建

北條立敬（碧山居士　碑文）
碧山令室

君諱惟長字立敬號碧山適齋第四男母中村氏嘗從長兄霞亭遊寓洛讀書學醫為人愿謹志在幹蠱文政十一戊子八月晦以病暴卒歳三十四娶田口氏生三男一女嫡新太郎遺腹大三郎次男及女早世

明治八年亥三月三日卒　行年七十七

通称　禮以女

三支道菴之　享保十一年十月二十八日之

北條山家太右衛門大道梵仙信士　寛政十一年三月二日之

北條立敬（碧山居士／碧山令室碑文寫）

君諱惟長字立敬號碧山適齋第四男母中村氏嘗從長兄霞亭遊寓洛讀書學醫為人愿謹志在幹蠱文政十一年戊子八月晦以病暴卒歳三十四娶田口氏生三男一女嫡新太郎遺腹大三郎次男及女早世

明治八年亥三月三日卒行年七十七

通称禮以女

○
三友道益庵主
享保十一年十月廿八日亡

大道鶴仙信士（北條内藏太郎） ○
寛政十一年三月亡

霞亭居士招魂碣

文政六年癸未八月十七日居士卒江戸邸祀於余
家因立坎石以爲進香所居士諱讓字子讓稱讓
四郎姓北條氏霞亭其號志洲的矢人文化癸酉
尋余來備後神邊都講余塾余以妹女井上氏女
爲箕室居爲始貫神邊文政辛巳我　福山府
公召爲文學賜俸三十口擢乃家東行居三年羅病
不起年四十四葬巣鴨眞性寺誌銘具於其家而
寡維歸余家女子二人長先居士六年季後一
年皆夭

菅晉帥立

霞亭先生之配井上氏墓

君諱敬姓井上父曰正信備後沼隈郡早戸村里正母菅氏茶山公翁之妹也自幼為翁所養翁無子養其弟子楠之子文齋先生為嗣配以君生三男其二皆夭季繩令兼公翁之後文齋早歿公翁焉志摩人北條霞亭先生督塾生再以君配之福山侯擢霞亭為儒員携家移江都邸居三年霞亭又病歿生二女長夭携次女歸公翁家又夭養河村氏子退為嗣今襲儒職住福山霞亭之疾也君湯藥扶持看護周悉侯聞賞之賜金若干公翁晩年患瞻膧又晝夜侍奉莫所不至公翁既歿乃幹家事延翁之門人佐々木春齋教繩退三年復遊学上國共至成立不墜先業君之力也君為人寛柔沈靜而善病老年怯寒閉居一室詠和歌自娯積為若干卷嘉永二年未酉八月二十三日病歿享年六十有七葬神邊驛南先塋之

参考
箱根は小田原領であつて
ので大久保侯が
が関所事を
勤めてゐる
関所役人の
定員は
書役一人
目付二人
平目付二人
請負役定番三人
路番三人
足軽若干人
山の見張番

先ず箱根にて此書付「金三分三朱」が宿違であります　葉山が思ひ違をして手銭を書いたのであらう

関所で抑留せられたのではない　関所の役人が金三分を受けたのでも又其の収賄でもない　如何に其当時の関所吏だからとて収賄する様な不正なをはなかつたと思ひます　なぜならば公儀の監督が厳重で此人同付が警戒して監視してゐるから役人が金品を受る様なことは出来ない　あつたら厳罰に處せられます

伊澤蘭軒　その二十六　その二十七

秋荘老人

次法號後凋院光要言請假大娥君之游浪華只予厚累世之好每過訪又遣二子来學故因二子之請銘其墓銘曰

幼長於翁々命之從事夫育孤柔順有終二兒
夏哺能報劳苦吟詠安心就彼樂士

嘉永四年辛亥三月　筱崎弼撰　男槩書

孝子　菅瑁北條退　立

旅籠六人
湖の足番
旅籠六人
箱根の本陣は六軒
であります

関所より数十間先きに（江戸の方へ）箱根本陣六軒の手代詰所があった　そして一軒で二人づつの手代が関所の御門と定時に詰所へ出張して定宿大名の家来が上りの節関所案内人と立寄りて世話役をしてゐるものであります

乃で所謂本陣の手代より出張の手代が證文と整の殿様がお通しておいてから注意して更に待たせて無事に関所を通過させたのであらう何れにて無礼としてお礼お庭の謝礼を手代等に遣つてのであります

たとへば證文に名ありと認めしあつて無き場合には江戸表へ報告
其身分をは容易でないから從つてかゝる者をして関所へ照合する様
にすれば通れます　それは関所を通行ぬ為に詰所で手代迄が
世話をしてくれるのです

初代　北条譲四郎譲

文政二卯四月十七日　五人扶持被下置　折々弘道館江出席致世話候様　同四巳四月十三日　御用出府　同年六月七日暫御差留　同日　丸山学問所江罷出講釈其外諸生取立御儒者ト申合候様　同月十三日　三十人扶持被下置大御目付格御儒者被召出　同日　奥詰出府之所在番　同年八月九日　江戸引越　同六未八月十九日　病死

同年十月五日　厄介扶持　三人扶持　同月廿三日　御在所引越願之通被仰付候

北条、新助　退

実河村意作次男

数十間並んで（江戸の方へ）最後部に床六
代詰所があった　そうして一緒で二人づつ
が医所の御門と会議の詰所へ出張して
右の家来が上りの節医所業内人と着り
て世話役をしてゐるのであります
乃で詰所の下詰より出張の者代が控えと警
の統掛がお通ししてゐるから注意して更に統せ

弘化二乙巳正月十七日三人扶持被下置御通掛御目見
之格合 弘道館會讀掛 同年十一月十七日 拾人扶持
御儒者被召出 大目付觸流

海雲堂

悔堂先生事跡

悔堂先生諱ハ知退字ハ進之通称ハ新助悔堂ト號ス
文化五年戊辰某月某日福山西町ニ生ル幼名道之進舊福
山侯侍醫河村東郭翁（諱ハ元善通称ハ亮得東郭ト号ス）ノ第二子ナ
リ幼時ヨリ茶山菅先生ニ学ブ 文政七年茶山先生東郭翁
ニ請フテ先生ヲ養ヒテ北條霞亭先生ノ後ヲ兼ケシメ名ヲ
退藏ト改ム 是レヨリ霞亭先生ノ詩文ヲ伊勢京都江戸ノ
奥羽越後地方ヨリ中國四國九州ニ至ルマデ弘ク全國ノ知熟
朋友ニ求メ蒐輯シテ遺稿ヲ編纂シ篠崎小竹先生
ニ請ヒテ之ヲ校正シ十数年ヲ経テ定本成ル 文政十年八月十
三日茶山先生歿ス 文政十一年江戸ニ之キ聖堂ニ入リ佐藤一

斎先生古閣（賀）侗菴先生ニ師事ス退一郎ト改名ス在学
三年天保三年郷ニ帰ル途中七月十四日富士山ニ登リ中
峯ノ石室ニ宿ス十五日早朝風雨俄ニ至リ午ニ至リ益甚
ク沙ヲ飛シ石ヲ飄ス三日ニ連（亘）リテ已マズ十八日差晴十九
日暁快晴乃チ下ル是ヨリ東山道ヲ経テ大坂ニ至リ舟
ニ乗リテ福山ニ着ク菅氏ニ帰ル退補ト改名ス天保三年
養母井上氏姪孫女山路氏ヲ娶ル菅氏ノ屋敷内門堂ニ別
居シ学問所新宅ト称ス諱由嘉女子生ル於貞ト名
ク天保七年大坂ニ之キ篠崎小竹先生ニ師事スルコト一年
余天保八年家ニ帰ル天保九年二月三十日卯刻男子生ル

徳太郎ト名ク年月不詳関室ヨリ菅氏ノ前国道ノ南側帰谷ヘ通ズル道ノ西側ノ菅ノ屋敷内ノ家屋ニ移リ居ル
弘化二年正月十七日福山侯（正弘公）俸三口ヲ賜ヒ御通リ掛御
目見ニ進シ弘道館会読掛ヲ命ゼラル同年十月二日河村
東郎翁病没ス福山西町通安幸ニ葬ル享年七十四
（霞亭先生在世中小学纂註ヲ校正翻刻シテ之ヲ書生ニ分ケ
教導セント欲シ刻成テ卒シ其志ヲ遂ケズ先生其遺志ヲ
継ギ之ヲ官ニ納メ誠之館蔵版トナシ藩学ノ教科書ト
ナシ又関藤々陰江木晋戈鈴木師揚等ノ諸儒ト議シ
建白シテ学制ヲ改革シ藩学ヲ興ス）同年十二月十七日
俸十口ヲ賜ヒ大御目付觸流トナリ御儒者ヲ命ゼラル同日

福山ニ引越スベキ旨ヲ命ゼラレ西町ニ於テ邸舎ヲ賜フ是ヨリ土木ヲ起シ翌年五月ニ至リ落成ス依テ挙家福山ニ徒ル通称ヲ新助ト改ム 生母高橋氏ヨリ迎ヘテ奉養ス（高橋氏諱徳福山福徳町ノ人松永村高橋寿輔ノ一族ナリ河村東郭翁ニ嫁シ元造及ビ先生ヲ生ミ離婚トナル後松永村ノ人岩居某ニ嫁シ一女ヲ生ム名ヲ加賀ト云フ松永村高橋要平ニ嫁シ一子ヲ生ム岩居氏絶家シ高橋氏ニ寄留セシナリ要平ノ子幼名幸太郎ノ後圭輔ト改名シ医ヲ業トス要平ノ本家）高橋寿輔ノ養嗣子トナル 弘化四年五月四日配山路氏病歿ス享年三十三 神辺駅南網付谷ニ葬ル 釈氏性貞院静誉妙勤大姉ト諡ス 嘉永元年六月菊田氏ヲ娶ル嘉永二年八月二十三日養母井上氏病死ス 駅南網付谷

ニ葬ル 今年正月二十八日子ノ上刻男子生ル孝之助ト名ク安政元年十二月十七日式日ニ肩衣ヲ着ルヲ聴ルサル 安政二年二月十七日江戸在番ヲ命ゼラル 長男新兵衛修業ノ為メ連レ行キタキ旨ヲ官ニ請フ官之ヲ允ス 即チ実人母高橋氏ヲ松永村高橋氏ニ妻菊田氏二男孝之助ヲ中山田村菊田氏ニ嫂菊田氏ヲ菊田氏ニ寄留セシメ家具ヲ河村菊田辻ノ三家ニ預ケ沼隈郡津之郷村茂十ヲ留守居トシテ長男新兵衛ヲ連レ御賃人（小林政治組ノ者）櫃持中間ヲ従ヘ同年三月九日福山北濱ニテ舩ニ乗ル 適天候険悪舩ヲ出ス能ハズ 十四日天気快晴乃チ発ス 同月十五日大坂邸ニ着ス 同月二十九日江戸ノ邸ニ着セリ

此行饍ヲ賜リシ者百六人送リテ船ニ至リシ者五十四人ナリ丸山ノ邸舎ニ居ル同年五月廿六日侯召シテ從容トシテ勸諭シ酒饌ヲ賜フ同月二十八日又高田邸ニ召シ侯ノ上馬セラルヽヲ拜觀シテ後勸諭セラレテ酒酢飯羹熟鰒鱠餚應、行厨ヲ賜ヒ且木杯ヲ賜フ金泥畫五鶴）同年十月二日亥ノ刻地大ニ震フ地中火先ヲ發スルモノ二度人家壓倒同時ニ四方火ヲ失シ紅烟天ニ滿ツ丑ノ刻長男新兵衛ヲ連レ丸山邸ヲ發シ辰ノ口上邸ニ至ル丸山邸マデ道程一里餘アリ途中兩傍ノ人家皆壓倒僅カニ存スルモノモ亦傾斜居ル能ハス屢火ニ遇フ之ヲ避テ

漸ク上邸ニ達ス上邸ノ殿宇長屋悉ク壓倒ス即チ侯ノ安否ヲ候フ侯及ヒ夫人諸ノ姫君皆健全但夫人ハ殆ンド危カリシト云フ、我邸内ハ家屋壓倒スト雖負傷者少ク亦火ヲ失スルコトナカリキ卯ノ刻還ルコノ地震ニ付火ヲ失スル大ナルモノ二十五ケ處小ナルモノニ至テハ數フルニ勝フヘカラズ火災ノ個處大凡五十ケ處中ニ就テ最大ナルモノハ吉原遊郭ヨリ深川ニ達スル火災ナリ亥ノ刻ヨリ翌日申ノ刻ニ至テ漸ク鎭火ス市中ノ人壓死十萬四千人アリシト云フ又家屋ハ或ハ燒ケ或ハ倒レ存スルモノナシ　侯及ヒ夫人姫君皆丸山ノ別殿ニ移ラル是ヨリ日々地震同月十日ニ至リ少シ止ミ稍穩カニナリシ同月十五日侯夫人ト共ニ丸山誠之館ニ移ラル安政三年三月二十三日奧勤ヲ免ゼラル同日在番期月ノ處差留ラレ同

年六月二十一日在番詰越ヲ命ゼラル同年十月生母高橋氏
疾病乃チ往復日数ノ外二十日ノ暇ヲ賜ヒ同月二十六日申ノ刻
長男新兵衛ヲ連レテ江戸ヲ発シ十一月七日大坂ニ着シ同月
十四日神辺ニ着シ菅氏ニ過リ直ニ松永村ニ行キ高橋氏ニ
謁シ十五日家ニ帰ル侍養二旬漸ク軽快ニ向フ依テ十二月
五日福山濱ニテ船ニ乗リ同月九日大坂ニ着シ同月二十二日江戸
ニ着ス安政四年三月九日上下格ヲ命ゼラル（常ニ肩衣ヲ着ス）同日在
番結越ヲ命ゼラル同年七月十七日正弘公卒シ節正教
公封ヲ襲ク安政五年三月二十五日候在番ヲ免シ帰郷
ヲ命ゼラル會病ニ依テ緩期ヲ請フ官之ヲ允ス同年五月
四日疾少シク愈ルヲ以テ官ニ告リ翌五日端陽ヲ以テ

公ニ朝ス公引對ヲ賜フ同月七日候親シク召シテ帰郷ヲ命ゼラル
且特命アリテ尚在番中出精相勤門弟ノ者引立シ殷満
足致ス云々ノ命アリテ手カラ縫上下ヲ賜フ既ニ出ヅ執政
公ノ命ヲ傳ヘ在番中ノ功労ヲ賞シ更ニ麻上下並ニ金五
百疋ヲ賜フ同月九日江戸ヲ発ス親故門人饋ヲ贈ルモノ五十七人
発程ノ時郭門マテ送リ来リシ人（長坂儀兵衛、森戸縣
齋藤退蔵、渡邊揖之助、
庄井大三郎、三富孫太郎、峰島半次郎、瀧廉介、根岸鐡三郎
高橋壽泉、江木繁太郎、三上三平、三上三哉）
十三人送テ品川ニ到リシ人（宍戸右橋、高橋倭三郎、鈴木常三郎
萩原金次郎、長坂要之助、森戸鶴三
秋月鉄三、高橋貞吉
秋月稿之助）九人品川ニテ餞宴ヲ開キ送者ニ別
ル之ヨリ先キ寛政新居主税役旋リ國ニ帰ル依テ同行ヲ約

シ品川ニテ相會ス共ニ歸途ニ就ク同月二十四日大坂ニ着シ
六月二日福山ニ着ス 仝年七月石川和助ヨリ左ノ書物ヲ贈
ル石川和助後本姓ニ復シ関藤ト改メ名ヲ文兵衛ト改ム福
山ニ在ル時ヨリ最親善常ニ往来シテ夜ヲ徹スルコト屢ナリトイフ
文久元年五月二十七日正教公卒ス弟正方公封ヲ襲ク
文久二年正月十五日生母高橋氏本年歳八十歳ニナラレシ
ヲ以テ官ヨリ酒饌料金二百疋ヲ賜フ文久二年五月疾ニ
因テ告ヲ請フ百日ニ満ツレドモ愈ヘズ八月奥勤并
ニ御儒者ヲ免セラル文久三年十二月二十七日文学教授
兼鉄門内坂上邏所ニ直スルヲ命ゼラル元治元年四
月二十三日奥勤ヲ命ゼラレ御供頭ニ准ス命セラレテ廟謨

ニ参預ス同年五月時氣ニ感ジ宿疾発シ小水利セズ挙歩ク
水腫七月ニ至リ益甚シ殆ンド起ズ八月以後漸ク軽快ニ
向フ元治二年正月特ニ出テ公事ヲ奉セントス又俄ニ時気
ニ感ジ熱度高ク而シテ屢進退アリ體既ニ羸弱加フル
ニ斯ノ劇病ニ罹リ遂ニ支フル能ハズ同月十六日申ノ刻
歿ス享年五十八釈氏自強院矜誉虔誠居士ト謚ス
同月十八日申ノ刻東町洞林寺ニ葬ル藩士ノ會葬者
百四十人ナリ（執政悉ク使者ヲシテ會葬セシメ参政新主税吉
田助三郎（豊文）山岡衛士（後謙介ト改）等ノ諸士モ
會葬セリ）
元治二年四月七日、慶應ト改元セラル、慶應元年六月六日
実母高橋氏、病死ス享年八十三 東町光善寺ニ葬ル長女
於貞御長柄奉行辻源左衛門名友綱長男御廣間

番辻藤右衛門ニ嫁シ一女ヲ生ム千歳チトセト名ク藤太郎早
ク歿ス後ニ尾道竹鶴宗平（名高正後ニ双平ト改ム）ニ嫁シ四男一女ヲ
生ム明治二十年七月二十日午前七時ヲ病歿ス継配桒田
氏明治三十一年九月十七日病歿ス享年八十釈氏放
光院瑞誉寿祥大姉ト謚ス

悔堂先生華押

悔堂北條先生碑文

高橋叔道持其生父悔堂北條進之先生行状来曰先人歿後
墓木已拱矣而未及建碑以償其志罪大尤重將叙其遺行為
紙碑子為余叙之予幼時從先生受句讀家父亦師事之既有
兩世之恩義不可辞先是関藤々隂江木鰐水ニ公羽諾碑文而歿
竟至使予援筆也不可已也乃謹叙之曰先生諱知退字進之號
悔堂通稱新助北條氏福山藩侍醫河村重善公羽次男出嗣霞
亭北條先生後其先志州的屋人僑于北條長氏脩霞亭先生
夙有學德尚風騷遊于洛西嵯峨来游于菅氏廉塾為都
講茶山翁奇其才以姪井上氏妻之生二女皆夭霞亭先生歿
後翁以先生堪繼家學請重善公羽為之嗣也先配山路
氏井上氏姪孫女也早歿有一男一女継室桒田氏生男郎

厚叔道先生年十七継家以家学自任博渉書史尤
邃易理詩兼諸体長絶句風格宗唐宋少時学
於茅山翁課得其衣鉢弱冠之江戸従遊于佐藤一
斎古賀侗菴諸儒定学三年帰郷又師事于篠崎
小竹翁翁皆推奨之不措云居恒在菅氏弘化二年正月
補福山藩学弘道館教授賜俸三口同年十月補儒
員俸十口賜第宅于福山西町移家焉安政二年三月秖
役于江戸任丸山邸兼任侍講安政五年六月役竣帰藩
文久二年五月疾起請告期満不愈八月解官文久三年
十月再任文学教授尋兼侍講秩准供頭歴事藩主
阿部正弘正教正方三公当是時天下多事内憂外

患荐臻公釐革庶政先生建言知無不言其言剴
切中時弊公信任頗厚賞以時服器物蓋異数也
其所交遊皆為天下之志士外則森田謙蔵湊川寛
夫蔵合雙石広瀬旭荘南部安貞鴨井東仲内則
鈴木建蔵山室子彦　鈴木師揚門田堯佐江木晋戈小
早川景汲諸氏而其最親善者為関藤藤陰嘗与
藤陰晋戈二氏建議更革学制文学蔚然而興焉先
生為人方正謹厳手居無惰容心有操守人不敢侵以
私奮然誥務躬行教人不倦子弟受教者事
之加父嘗有所悔失不貳自号曰悔堂人益服其
徳其在官也小心翼々雖細務弗忽要在忠信不

歟也生父重善公翁歿也居喪如古禮三年不懈人勸少喫
魚肉養体則泣涕不聽咸謂曰今世之顏丁也常蒐輯
霞亭先生遺稿不遺餘力請小竹翁校正之復繼遺
志刊行小學纂註爲藩學藏版公其書于天下性善
病而又嗜酒乃節飲不復大醉恒謂人曰君恩涓滴
猶未報且欲繼父志而未成今慈母齒踰八秩吾先死
則不忠不孝之罪大矣不可以不愼也醫謂孱弱善病
如先生而保其生若是以其愼疾故也蓋重善公翁歿後
先生列士籍迎養生母高橋氏奉養備至時先生
有疾稍愈出勤雖病勢劇猶在職不怠元治二年
正月十六日歿享年五十有八葬于城東寺町洞林寺塋域
知與不知皆聞之莫不痛悼士大夫會葬者殆

千有餘人嫡孫德太郎嗣家先生學之德代之罕匹如
是而位不稱其器且抱疾不能出而行其志退而養
子弟各令得樹立其功績不尠終身志躬事君保生
養母所謂居易俟命者晚年國勢一變慷慨憂世
非尋常儒士之比如先生者豈不可謂君子耶雜錄若
干諸文稿四卷建議策海防策各一卷藏家今
所敘閱歷僅舉其梗概耳予之[illegible]慢然如舞
嚴容悽愴不能禁幼時從學如予而尚如是況
爲其學德所薰陶者惓惓當不堪追慕之情也
不顧僭妄敢作文載系以其辭世詩代銘其詩曰
死生有命我知矣疑猶覺人間念慮遺

親老兒稱豈遑恤君恩莫大報無期

大正二年十一月下浣　後覺大和敬直謹撰

河村系圖

彌左衛門尉勝興男
藤原勝成　杢左衛門尉

重成　杢右衛門尉　始仕於福山阿部侯
重明　甚五右衛門
重継　藤右衛門
重矩　藤右衛門
圓了　松治
重芳　意篤
重常　八十兵衛
重善　意得
元重　八十兵衛
女子　水無瀬　早世
重秀　本九
重監　元監字士郁
重隆　岩雄

退
重文　敬藏　新助字進之　嗣北條氏
重貞　幹事　竟篤
実福島辰五郎長男（吉ト云）
女子　於天留　重貞妻
女子　槇野　早世
女子　於静　適前田氏
女子　於幸　適岡本氏
重固　大造
藤三郎　早世
福太郎　早世
女子　小梅　適品治郡大橋村西林寺
女子　於菱　早世
女子　小春　早世
女子　於松
元次郎　早世
女子　喜子

笠峰先生事跡

笠峰先生諱ハ念祖字ハ修德通稱ハ德太郎笠峰又何
若人有齋ト號ス天保九年二月二十三日卯ノ刻神邊七日市
新宅ニ生ル嘉永五年正月十九日悔堂先生先生ヲシテ月次
「五節句出仕ヲ許サシメ度旨ヲ官ニ請フ同月二十三日官之ヲ
允ス嘉永七年正月十五日前髪ヲ剃リ元服ノ式ヲ挙行ス
同月二十八日名ヲ新兵衛ト改ム同年十二月七日侯（正弘公）召
出シテ御供番ヲ命ジ無足ニ班シ俸二口ヲ賜フ安政元
年大御目付原田圍右衛門忠實ノ長女ヲ娶ル名多
喜代安政二年正月二十五日誠之館會讀掛ヲ命ゼラ

ル同年三月九日悔堂先生ニ従テ江戸ニ之キ同年四月二十二日林
圖書助公ノ門ニ入リテ學ブ同年六月二十七日誠之館助教
ヲ命ゼラレ俸二口ヲ加賜ス同年十月二日夜亥ノ刻地大ニ震
フ遇樓上ニ在リテ書ヲ讀ム狼狽飛下障子ヲ蹴リ破リ
走リ出ヅ丑ノ刻悔堂先生ト共ニ辰ノ口上邸ニ到リ侯ノ安
否ヲ候ヒ卯ノ刻丸山邸ニ還ル同年十二月十六日安中板倉
侯ノ儒官添川拙堂翁（名ハ栗 通称寛平 字寛夫又廉齋ト号ス）ノ門ニ入リテ學
ブ同月二十三日益三郎ト改名ス安政三年十月二十六日悔堂先
生ニ従テ丸山邸ヲ発シ十一月十四日神邊ニ着シ菅氏ニ
過リ悔堂先生ハ直ニ松永村高橋氏ニ之キ先生ハ別

レテ家ニ歸ル安政四年七月十七日正弘公卒シ弟正教公封
ヲ襲ク同年十二月七日俸十二石ヲ加賜ス此年男子生ル德太
郎ト名ク安政五年七月二十九日允可ヲ得ズシテ尾道ニ之キ忍
ニ遊里ニ遊ビシヲ以テ御供番并ニ誠之館助教ヲ免シ俸
十二石ヲ減ス萬延元年七月五日御供番及ビ誠之館助教ヲ
命ゼラレ俸十二石ヲ賜フ文久元年五月二十七日正教公卒
シ弟正方公封ヲ襲ク文久二年八月三日御儒者心得ヲ命セ
ラル文久三年三月七日御廣間番ヲ命セラル元治元年朝
廷幕府ニ勅シテ毛利氏ヲ征セシム幕府徳川慶勝ヲ
総督トナシ諸侯ノ向フ所ヲ部署ス時ニ侯山城國八幡

ヲ守衛ス幕府之ヲ免レ更ニ征長藝州口ノ先鋒ヲ
命ズ是ニ於テ備國ニ帰リ安藝ニ出張ス先生其先鋒
トナリ十一月朔日福山ヲ発シ五日廣島ニ到リ妙慶院
ニ宿ス尋デ長人罪ニ伏シ同月十四日三國老益田右
衛門佐福原越後國司信濃ノ首ヲ致ス本営國泰
寺ニ於テ之ヲ検ス朝廷乃チ長人ノ罪ヲ免サレ事平ク
元治元（二）年正月二日家ニ帰ル同月十六日梅堂先生病歿シ
同月十八日東町洞林寺ニ葬ル元治二年四月七日慶應ト改
元ス慶應元年四月幕府再ビ征長ノ令ヲ発シ備後石
州口ノ先鋒ヲ命ゼラル同年十二月備ノ先鋒トナリテ福
山ヲ発シ石州ニ赴キ江津ニ屯ス慶應二年六月進

デ益田ニ屯ス十六日長人侵チ来リ戦フ十七日濱田ノ兵来リ
救フ乃チ力ヲ戮セ大ニ戦フ瀬尾某細川某戦死ス濱田ノ
兵城ヲ棄テ退散シ中軍至ラズ因州雲州消息絶ヘ孤軍
戦フコト能ハズ依テ軍ヲ班ヘス七月家ニ還ル慶應三年
十二月十七日正方公卒ス慶應四年正月九日長人杉孫七
郎兵ヲ将ヒ来リ襲フ前日小森ノ戍所ニ至リ直ス黎明
走リ帰リ家内ヲ整理シ萱堂及ヒ妻子ヲ菅氏ニ遣リ
結束シテ城ニ入ル命ジテ大手門ヲ守衛セシム己ニシテ和
成リ事平ク尚城内ニ留ル三日十三日家ニ帰ル同年三
月朝廷本藩ニ摂津西ノ宮ノ守衛ヲ命ズ乃チ出
張ヲ命ゼラレ同地ニ赴リ尋デ朝廷本藩ノ西ノ宮

守衛ヲ免シ更ニ摂津天保山ノ守衛ヲ命ズ依テ西ノ宮
ヨリ天保山ニ従ル幾モナク病ニ依テ帰郷ヲ命ゼラレ四
月十五日天保山ニテ乗船同月十七日家ニ還ル此年諸
士協議シ正桓公ヲ養フテ阿部家ノ嗣トス八月朝覲
ス乃チ公駕ニ従フテ京都ニ赴ク此月徳川ノ旧臣
榎本釜次郎(武揚)等軍艦八艘ヲ將ヒ品川海ヲ脱シ
北走ス朝廷本藩ノ天保山守衛ヲ免シ更ニ脱走
兵征討ノ救援ヲ命ゼラル是ニ於テ公ノ扈従ヲ免シ
更ニ箱館出張ヲ命ゼラル慶応四年九月八日明治ト改
元セラル明治元年十月家ニ帰リ止ルコト一日ニシテ

福山ヲ発シ箱館ニ赴ク箱館滞営中姓名ヲ変ジテ喜多
増一ト称ス箱館ニテ秘書記ヲ命セラル明治二年五月榎本
釜次郎等皆出デ降ルニ依テ六月十一日家ニ帰ル帰国後仍
ホ秘書記ヲ勤ム同年九月新一ト改名ス同年十月七日權
掌史兼公用人ヲ命ゼレ同年十一月東京祗役ヲ命ゼル同月
十六日僕小林粂治僕喜助ヲ將ヒ福山築切ニテ船ニ乗リ
四開ニ至リテ泊ス翌十七日四開ヲ発シ同月二十一日大坂邸ニ
着ス十二月五日東京丸山邸ニ着ス祗役ノ初ヨリ放蕩
常ニ遊里ニ至リ留連シテ負債積畳ス依テ祗役ヲ免
セラル同藩士堀常之助課リ之ヲ歎キ金四十余円ヲ
貸與シ之ヲ以テ負債ヲ消却シ且再命ヲ藩ニ請フ依

△明治三年脱

テ再ビ祇役ヲ命ゼラル之ヨリ益放蕩ヲ極メ借財山積
△ス七月二十八日夜遂ニ東京根津高田屋ノ娼妓ト共ニ脱
走ス藩特旨ヲ以テ猶豫ヲ與ヘ捜索セシム河村重固井
手猪之助等協心戮力捜索スレドモ其所分カラズ乃チ岡引ニ
依頼シ尽力シテ百方捜索スレドモ遂ニ得ズ日数嵩ミ猶
豫スベカラザルニ至リ八月十八日河村重固井手猪之助ヨリ
脱走ノ趣ヲ藩ニ告ク是ニ於テ九月八日籍没セラレ九月
九日邸舎家財受取ノ為メ御徒士目付石塚金太出張
ス命洗蔵引渡ヲナス家族流離萱堂桑田氏ハ桑
田氏ニ妻桑田團右衛門忠實ノ長女桑田氏名多喜代ハ桑

田氏ニ命洗蔵ハ河村氏ニ長男徳太郎ハ菅氏ニ寄リ祖
先ノ祭祀ハ菅氏ニ委托ス長男徳太郎ハ菅氏ニ居リシガ
後江州蒲生郡ニ之キ小学校ニ奉職シ明治三十三年
十月十一日苗村立川守尋常小学校訓導兼学校長
ニ任ス
明治十三年五月上婦人河村重固ヲ訪ヒ曰ク妾ハ曩年
北條新一殿ト共ニ脱走セシ者ナリ當時東京ヲ出テ宇
都宮ニ至リソレヨリ所々ニ流寓シ艱難辛苦ヲ極メ遂ニ
栃木縣上野國山田郡市場村廣田某氏ニ寄留シ
姓名ヲ廣田恒ト改メ同縣中学校教員トナリ月給
金三十円ヲ受ケ居リシガ本年一月二十日中風病ニテ

歿シ廣田某氏ノ瑩域ニ埋葬セリト云ヒシトゾ因ニ廣
田氏ハ豪族ナリシト云フ
配原田氏ハ脱走ノ際離別スベキ旨書キ遣セシ
ニ依リ其趣ヲ官ニ告ゲ離婚トナセリ

北條霞亭

謹啓仕候秋冷之候御座候處先生益御健勝ニ入らせられ候哉
伺ひ申上候扨ニ突然愚書奉呈仕候 拙家ハ祖先以来代々旧福
山藩主阿部家ニ奉仕罷在候(已に父も同家ニ勤仕致居申候)亡父
ハ詩学ヲ藩儒門田樸斎翁ニ親ミ通ヲ藩師木村定良氏
ニ学ヒ申候
先生ニハ大阪毎日新聞紙上ニ伊澤蘭軒先生傳記中掲載
相成毎々面白拝読仕候 不肖 左記ニ亡父ヨリ聞申候事及
見候事ヲ申上候 若シ少々参考ニモ相成候ハヾ幸甚ノ
至リニ御座候
又北條天放先生歸省詩嚢ハ先父入手所蔵仕居
候(天放先生ハ最早御覧之筈ニモ有之カトモ存居申候へ共也)

送年中ニ候間共ニ第一可参考ニモ相成候ハヽエハニこし伊
沢ノ上可迄御配慮之にて蘭山先生ノ塾ヲ息方ヘ候
方ノ途中御作ト猶色併ス右之ハ而御願申上候謹言

十月七日　　　　　　　　　横山廉次郎拝

森林太郎先生　　玉案下

備後福山賢忠寺（禅宗）本堂ノ左横ニ伊沢蘭軒ノ
墓トシテ有之候墓皆ニ碑文有之候様ニ聞居候
又福山ニ津山碧山（ヘキザン）ト申ス書家有之しハ島知足先生
門人ニ有之此碧山先生ノ後室ハ伊沢氏ヨリ入嫁セラ
レシニテ此ノ二子ラ現存セリ昨年迄福山ニ住居相成候今ハ
東京ノ由ニ有之し甥某ト津山某ト申ヲ師範ノ間ニ居
之碧山先生ハ気ノ毒ニ存し候若し伊沢蘭軒先生
ノ碑文并ニ又用ニ候ヘハ福山ノ知人ニ申遣し写させテも宜
敷御座候又津山未亡人ノ居所ナリ入用ナレハ聞合申
候ニモ宜ニ候又伊沢春庵ト申せし候ハ方ノ墓モ
同寺ニ有之ベク候先ハ右大略申述候

追伸御帰省中寄贈しハ開封ニテ御返送申上候

春社図

遅ゝ日斜鼓声中
柳弄青黄桃比红
茅宇柴扉知境僻
祀豚香黍想年豊
茜裙粧媚歸寧女
烏帽歌酣舞踏翁
無限太平春在眼
幅縑元自足春風

紙鳶

一線托身随意舒
飛翔力已尚徐ゝ
東風猶助沖天勢
有否人了比吹嘘

遐 字ハ進之 通稱ハ進助 又退輔、福山東町洞林寺ニ
葬ル 碑文未刻　号悔堂
遐ノ前妻、名ハ由嘉 備後沼隈郡藤江村山路利兵衛
ノ女 弘化四年五月四日神辺ニテ没ス 享年廿三、一男
一女ヲ生ム 男ハ即チ念祖、甫テ十歳、 墓銘ハ関藤
藤陰ノ撰
念祖 字ハ修徳、幼名ハ徳太郎 後新兵衛、益三郎
新一ト改ム 脱藩後、姓名ヲ廣田恒ト稱セリ 号ハ笠
峯、何着人、有齋 明治十三年一月廿日病死、福
山藩儒員、後権掌史兼公用人トナリ 東京祇役
中、放蕩ヲ極メテ脱走之又

公徳 字ハ叔道 通称ハ洗蔵 幼名孝之助 友松ト号ス 高橋杏五ノ養子トナリ神辺ニ住ス現存

松屋製

高橋洗蔵は北条レンスケの實子にして高橋家に養子となる北条増太郎氏と従兄なり北条家は零落し北条家の位牌は高橋家にあり増太郎氏は先年迄徳島縣中學校に教鞭を採られしと聞きしも其後の消息不明

高橋泥舟ハ道号未詳 中略

伊勢守ト云

有道院誠誉虔洸心居士

大正八年十二月十八日午後四時

五十分没　享年七十才

嗣子　五杉　福山市私立盈進商

業学校ニ通学、当年十七歳

郵便はがき

大日本帝國郵便 壹錢五厘 1½ Sn.

東京駒込団子坂上

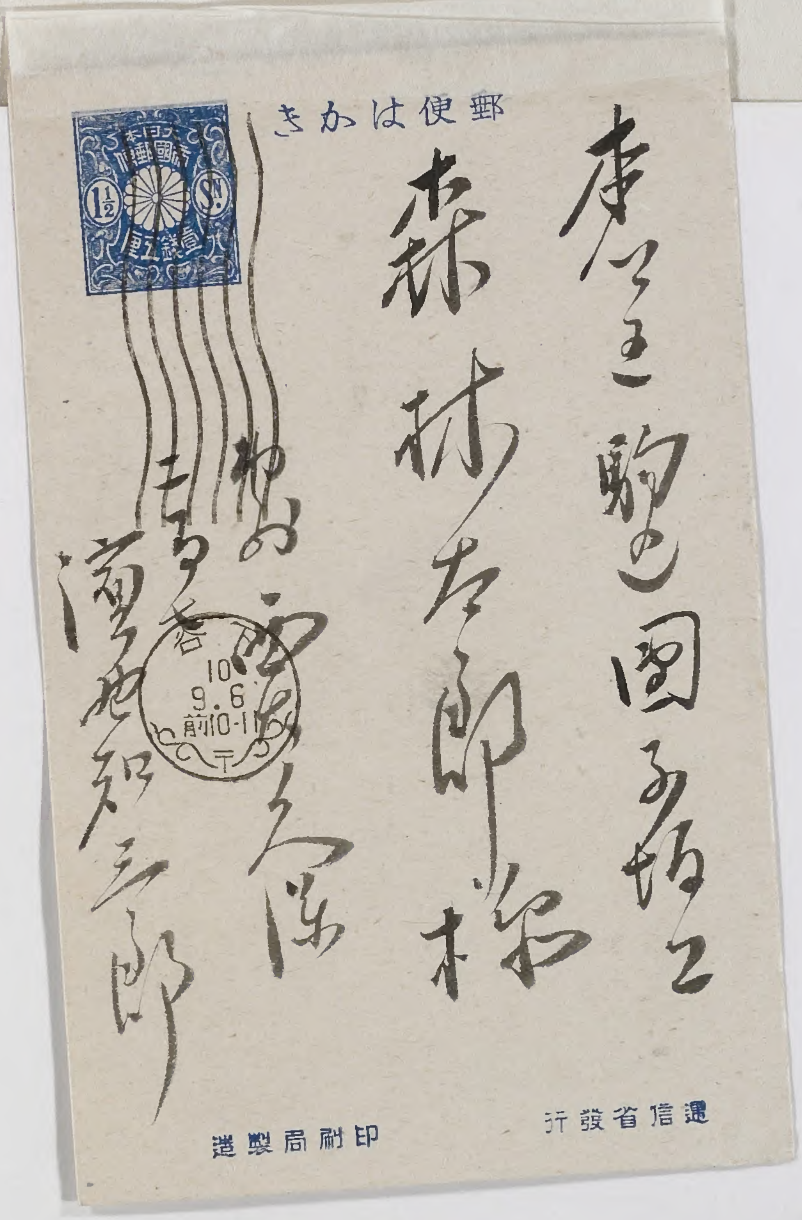
森林太郎先生

濱野知三郎

遞信省發行　印刷局製造

拝啓
高橋沈蔵居
大正八年十二月十八日
午後二時歿、今廿一日
神邊萬念寺ニ葬ル
嗣子五松ハ神邊
(深安郡川北村)ニ住ス
即チ菅家ノ隣ナリ
附テ
神辺トハ川北、川南ノ二村ノ
小部ノ衝ヲナス処ノ称ニテ今
日ニハ公称ニ無し
九月五日夜

郵便はがき


郵便はかき
大日本帝國郵便
壹錢五厘
1½
SN
本郷駒込團子坂上
森林太郎様
10
9.6
前10-11
遞信省發行
印刷局製造